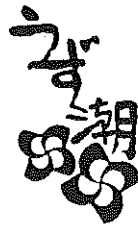


(第3種郵便物認可)

ソニー・コンピューター・サイエンス・ラボ(ソニーCSL)のシンポジウムに招待された。ソニーCSLは脳科学者、茂木健一郎氏が社員として働いている会社としても有名だ。

シンポジウムは2部からなっていた。すべての講演が、ユニークな研究に基づいた興味深いものであった。なかでも、第一部「新たな生命観を求めて」の暦本純一氏の講演は興味深かった。氏は、ヒューマン・ライフ・ログという目から脳へ入る信号を記録するといった研究を行っている世界の第一人者である。記憶の大半は、目から脳へ入る。そうした意味において、目からの信号の記録は記憶の記録につながっていくという。



やまもと たろう
山本 太郎

「憂いの篩」

集できないかと考えているんですよ。ある音楽を聴いたとき、あるにおいをかいだとき、人々はある心象風景を持つわけです。そうしたものを収集するといったことなんです。そんな夢のような話を可能にするかもしれない研究が現実のものとなりつつあることに驚いた。後日、その研究の持つ潜在的可能性を知人と話した。知人が言った。まるで「憂いの篩」だね。憂いの

「記憶の記録」という言葉を聞いたとき、以前、博物館の学芸員として話を思い出した。「将来博物館は、物だけでなく、人々の記憶を収

篩とは、ハリリーポッターに出てくる、考えや思い出を銀色の物質にして保存したり取り出したりできる不思議な道具である。その篩を使え

ば、複雑すぎて、その時点で理解できないこと、あるいはもつれた糸のように絡まった思考を、頭の中から取り出し一時的に篩のなかに保存することも可能になる。頭の中は、すっきりし、同時にもつれた思考は、時間をかけて篩がゆすられるに従って、徐々にもつれた糸がほどけてくる。まさに夢のような話だ。ソニーCSLは熱帯医学研究所ほどの小さな研究所だが、研究所の紹介には、「歴史の評価に耐えうる研究所」を目指すといった。シンポジウム招待客の一人であった山本寛斎氏は「創造的であるためには、奇と愛がいる。ここにはそれがあ」と言った。

今月、そこで講演をする。
(長崎大熱帯医学研究所教授)